

Raffiné Journal vol.02

目は、ときどき言葉より先に語る。

舞台の上で、
ふたりが目を合わせる瞬間がある。

言葉はない。

けれど、その一瞬で
何かが通っている。

観客にはわからない。

でも、
そのふたりにはわかっている。

映画 国宝 のインタビューを読んでいる、
ある言葉が残った。

横浜流星さんが、
自分の役について

「重心の高い人物」
と表現していた。

演技は感情で語られることが多い。

けれど、その前にすでに
身体の状態がある。

人が舞台に立ったとき、
その人の身体の重さの置き方は、
不思議なくらい伝わる。

どこに重さがあるのか。
どこに力が溜まっているのか。

それは立ち方や歩き方だけではなく、
沈黙の持ち方にも出る。

俳優の佇まいは、
身体の状態によって決まる。

映画の中で、
吉沢亮さんと、横浜流星さんは
歌舞伎の舞踊を踊る。

インタビューでは、
撮影前に一年以上の稽古を積んだと語られていた。

その時間は、
技術のためだけではない。

身体の状態を、
役の人物へと置き換える時間だった。

横浜流星さんは、
舞台上で目を合わせる瞬間について

吉沢亮さんの目から
感情を感じたと話していた。

人の目を見たとき、
言葉より先に
その人の状態が伝わることがある。

俳優の舞台では、
それがそのまま現れる。

物語の中で、
ふたりは
親友でもあり
ライバルでもある。


けれど、それだけではない。

同じ芸に向き合い、
同じ舞台に立ち、
同じ時間を過ごした人間だけが

ほんの一瞬、
視線で通じ合う。

観客には見えない。
でも、その人たちにはわかる。

芸の関係は、
言葉ではなく状態で通じる。



目は、ときどき
言葉より先に
人を語る。

Raffiné Journal vol.02
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné